古代三田の自然と技

その昔、住吉の神は、現在の大阪府下から市内高平地区に至る北摂の山々を支配していました。ある時、男神は木を伐(き)り出して川を流して運び、社(やしろ)を造ることにしました。そこで人の姿をかりて現地に行った際に、猪名川の女神を見初(みそ)め、妻にしたいと思いました。しかしその西隣には、武庫川の女神がおり、男神は、やはり恋心を抱いてしまいました。そこで嫉妬(しっと)した猪名川の女神は、武庫川の女神に向って石を投げつけ、生えている草を引き抜いてしまいました。それ故に今でも武庫川には大きな岩が転がり、草はあまり生えていないのです。この話は、大阪市の住吉大社に伝わる奈良時代の文献「住吉(すみよし)大社神代記(たいしゃじんだいき)」に記された伝承です。

武庫川渓谷

この伝承のように市域を含む北摂地域は、古代の首都圏である畿内(きない)の材木供給地でした。同じ文献からは、藍地区から加東市にかけての山々からも材木が供給されていたことを知ることができます。これらは加古川水系をたどって、播磨灘へ運ばれたのでしょう。また京都の醍醐寺(だいごじ)に伝わった平安時代末の文献には、現在の本庄地区の材木が、武庫川を通して西宮の河口まで運ばれたことが記されています。市域の豊かな山林資源は、古代都市の建築物を文字通り支えたのです。今も福知山線の車窓から垣間見られる、中流域とは思えない武庫川の渓谷美を神の仕業(しわざ)と見つつ、その岩々の合間を縫って三田の材木を流した古代の人々の姿がしのばれます。

これまでに紹介してきたように、三田盆地の段丘(だんきゅう)面の良質な粘土は焼物として、北部を中心とする山地の豊かな森林資源は建築資材に、そしてそこに生息した大型の鳥類の羽は朝廷の武具として都に供給されていました。畿内の北西端に位置する市域は、豊かな里のめぐみとそこに暮らす先人たちの優れた技術とで古代都市の繁栄を支えていたのです。

生涯学習支援課 市史編さん担当